

神功
皇后
三韓退治圖會
三



~13
3914
4





神功皇后三韓圖會卷之四

目錄

- 介九於錦江擊羅龍
- 阿連山儲奇計待倭兵
- 伊林菓備牽綴陣向倭兵
- 百濟王背古降皇后
- 高麗王晋思降皇后
- 翠嶽吹板笛欺真鳥

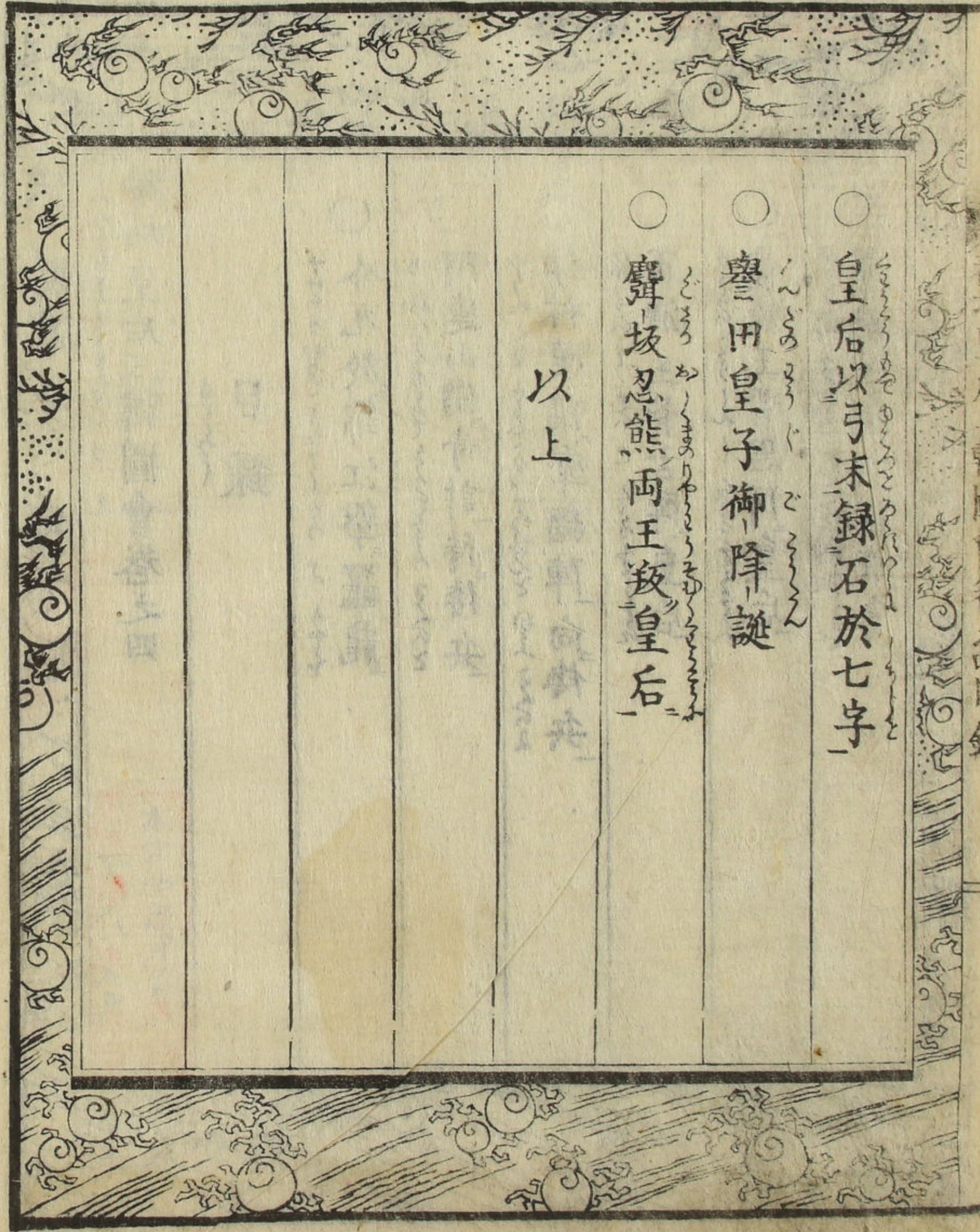
天正十年八月廿九日
本大學出版部 贈

○皇后以弓末録石於七宇

○譽田皇子御降誕

○薨坂忍熊兩王致皇后

以上



神功皇后三韓圖會卷之四

平安 山月庵主人 編述

介丸於錦江擊龍

程小神功皇后也。新羅國王巴三錦と首尾を撃つ。其次骸新
 羅國より西岳といへる處に葬つて。倍新羅國の幸として大輪真島といへる者
 小三百余騎とて入止り。又之を四十二万餘の軍勢と引率して。
 新羅の西隣に百濟國へ赴く。新羅國より百濟國へ渡らざり
 間、錦江と名付る。其幅二十丁計り。一の大川ありて。此錦江と渡らざれば。
 百濟國へは渡らざれば。皇后と始め倭兵悉くあらず。衆捨る。數百艘
 の澳舟とあり。是より打乗り渡り。大軍の正由人交易あり。渡り
 ぬ。數百艘の澳舟は掉取と定め。數十遍川中を往來する。安部
 介丸は渡らんとす。時は暁。俄に風烈しくなり。雲霧あり。小霞の逆浪

の向よりして一頭の龍躍出明星の如く而眼を介丸の乗舟と見えけ。舟中の人と呑んと飛かどり。此形勢は畏れ多く介丸の手も屬せし人々。気色と変りてあつらるが介丸少しも駭か直地は劍と抜拵く大喝声呼ぶらひ。呑んと欲して飛かどり龍竜の首と打落せり。衆人介丸の動きと感い。つ。あつらる賞して止た借介丸は彼龍竜の首と携へ此舟陸に着やの皇。后へも奉りし。皇后大ひは介丸が功と賞く多ひ汝倘此龍竜を撃つる所は。我日本の民として空しくみん失せらん。能も較手得しもの多くと。御氣色殊。よろらしくて衆兵渡り来るを待せし。おろく百濟國へと隊伍をきて進。まら。此錦江と渡りて西に向ひ五里余りて竹山の白馬嶺と名付らる一の嶺。あつ。左右の路互に入交り。兩峽の溪間狹くして南北より押かあひひく。尖。崖高く女蘿繁茂し。中ふ一川あつて彼錦江は流せり。其側は一路付らる。尖。は山水の好景なり。最愛すべし。の地なれども。軍旅の身も及て悞を生ずり境なれ。

ハ武内宿祢眉とひそめていへり。かやどの要害ありき。百濟の諸將如何なれば。余所てりして防の兵と此処よきあつらる。察すらふ伏兵の結構ありて。五里の軍。勢と鑿ませんとの入謀計する。油断がする者共し。味方は下知して彼方は方。の草の茂し。或は巖窟の間々と規規とせども。元より謀計の毎は極りたる武内。かりくと打笑ひ。儲々拙れ異城の軍慮かかやどの要害と打す。防の兵は何。事ぞ此軍も勝るぞ。急げや者共進めや先手と。歌舞動揺してぞ打過さる。つと勇ましくぞ入へり。

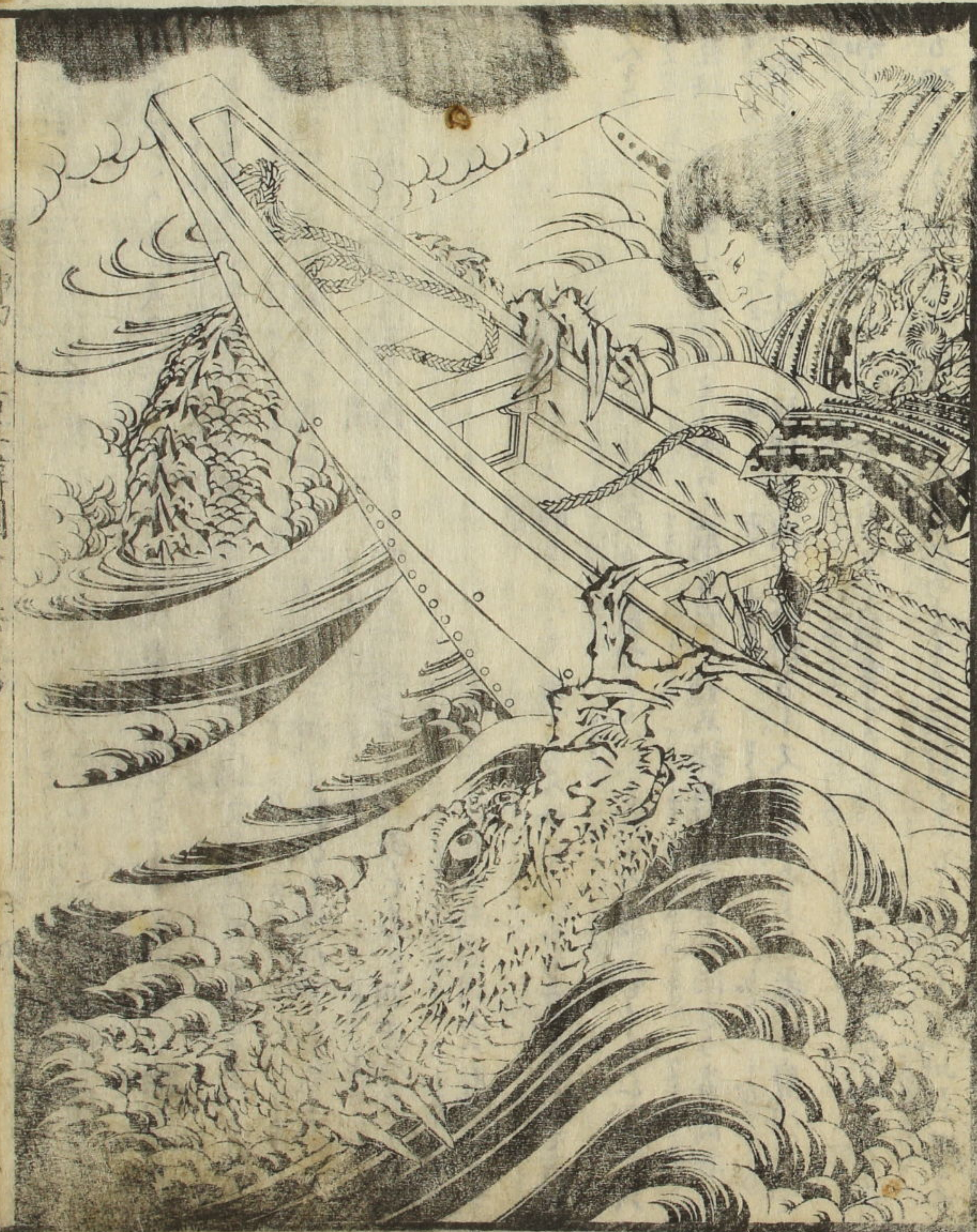
因よりの龍竜は今薩州辺の海中にも多く住む。時々之が為は命と失ふもの。あつと傳え聞えり。本草綱目にも龍竜の長げし者へ能氣と吐雲と起し。雨と降はるといへり。又一説は龍竜の肉と食すと長壽と得らる。

阿連山儲奇計待棲兵

是より前百濟國王背古六巴が國よりして新羅國へと加勢も遣はしる。

夫とく者終に倭勢の爲に撃つと深く駭き居る上は倭軍新羅國を
 撃取て新羅國と速に後へて國のめりて此上は我國へむ勢ひを棄
 けて乱入するに必定なりと大に心と苦しむ。臣下と集りて相殘りたり
 或は倭勢の勇猛なりとて國を捨て速に降参すとす。又は此地と捨て隣國を
 高廉國より長入國へ落行。然して後復に倭勢と戦ひて決せん三十六計を
 上とす。とす。而己の軍は更に決せん唯群臣臆病神ふさそり
 のをこれに國王背古も何となく戦ひと思ふ。速に此地と捨て高廉國
 へ落行て彼國の國王晉思と俱に計と決せんといふ。伊蘇慕といふ百
 濟國の家老職大言上り各の識見甚く非也此地と去るべし。尙
 此地と去るに冠は七分の徳とす。味方は三分の損とす。其故は人
 とすれば今百濟の農民米田より新米とす。人の年々悉く年貢とも納
 め。半は田地は笑しはうく猶殘るる時なり。檢て三韓に至り土地肥う國は
 して年毎に米と

取得とす。此は正は十一月上旬なり。此時は當つて土地と捨て高廉ふと
 所僧二度目の報を取得時なり。此時は當つて土地と捨て高廉ふと
 倭城あり。幸ひは糧と満しむべし。臣等するに大軍のては新羅
 一國の手ふ入るも程なく兵糧とす。困るべし。其時を後て新
 羅への通路と立す。倭城と中み狭んで兵糧攻より時の手とのを
 冠と撃入。又今高廉へと落行。高廉の楮大將猶も倭城に恨むとす
 べし。其上故將共は勇と論ず。高廉の諸將。吾新羅
 の諸將と共は力と合し。隣國まで入も耻辱と售ふ似たり。
 又は吾國は止まらず。新羅への通路と立す。兵糧攻を可なりとす
 勇々しくむひたり。此一言ふ。阿連山といふ者。席と進んで
 出たり。林將軍の言甚きより。吾國は計略とあり。倭兵と撃つ
 何のめりてあるんや。臣等々々。倭兵此地は入来らば昔は太公望
 行ひ。鯉魚と釣の計略とす。人の周の武王悪逆の討



王と討つれ太公望右の計畧と巧みありし敵奇来るとは早落行の様子なり
見せあはる一人の兵卒ともあつて唯林盤狼藉とありて酒肉堆く捨られり
しが寄手の面々一舟小曰く。あは是天のよする湯なり。我輩爰よ来つて服空
力竭ぬの酒と飲肉と喰う。其後陣中と搜へ戦ひを催はべしと。士卒と
俱ふ飲食すりとつゞ終らざる一声の鑼響く程あはれ四方八方より武
王の軍勢渦巻き出つても。毒二毒三は突きたるが。元来此酒肉の靡汁菓と
和しければ寄手の軍勢口より唾と流し。馬もろろ如く焼るがごとく。敢て戦ひ
んとする者なし。此時武王の軍兵悉々と取つて一人も残さず捕ふせしむ。是れ
臣此計略ふるは倭兵奇来らん前よ君と始り諸將も皆此南より竜岡縣の
一城小退き居る。倭兵の好むき肉と按排り。又酒とのけ。悉く靡汁蒸と
和して此城中ふさしおれ。倭兵よりこんで飲食するを待く捕くせしむ。是れ
かゆらるるふ速らるるが。国王背古と始りて諸將実もと賞しつ。此計略ふ

一決る折しも隣国より高廉より。李三鏐といふ者使者としてはるる
我高廉国へ倭兵攻入る時援兵とくふ旨と速高廉国王晋思よりの一書と進め
らるが。伊林菓是と王君背古奉り直地は披きとらるるが如何のゆへや
其姓名をも署さるる。されば心ある輩は是不祥の兆なりと密に眉をひそ
めしめて。諸高廉国への返書は倭兵攻来ると貴国より我地と先攻まら
るに必定るは我方へと貴国より加勢とありと死にたりと。李三鏐みよる
高廉国へ帰る。其後阿連山に計畧は後ひ背古王と守護して城中の諸
人へ悉く竜岡縣の一城に移り。早くも倭兵来ると一人も残さず捕とる
知夏のおとあはる人と伊林菓阿連山の兩人は倭兵の来ると待居る
伊林菓備牽綴陣向倭兵
時小倭軍の勢を進んで百濟近く攻寄る。阿連山のかひく用意の計略
と行ひ王城の中酒肉と儲け。杯盤狼藉とあり。是れ更一人の兵卒もた

空王城とありておれらぐう倭將武内宿祢彼方よりして城内の様子と良久
く觀望するに竈の煙立ちともく何とやら寂莫くして樹頭小野鳥集
つゝ人と懼るゝ体も又くねる偕に城中の者共の國王と始め我日本の勢ひ
懼るゝ山林へむも逃去する人先城中へ打入る亂るやとあへど皇后も
城中へ入る人との心をとすゝと諸軍とあはれ遂安郡とあへる地ふ旌旗と
ふせく敵の怪しまがるやうに止め奉り宿祢自りり五百騎ぐるりの軍勢と
及へ城中よりて打入る唯杯盤狼藉のりり更人影も又く此時士卒の
面々彼酒肉と飲食ととすゝる宿祢急ふ押さるや士卒と罵てひひる
ハ汝等異賊の捨ちたる酒肉と飲食せんとする何ごと我日本の耻辱なり飲
すべからば食すべからば其う人此体とと窺ふふ必定異賊の計略と覺へる
酒肉の中へ毒と和し劍鋒と持れと味方の軍兵と害せんとする結構とて
ふらるゝかやえ異賊の計略不陥ととあらねとつまもあつり重ねて宿祢

いへる中我此異賊の計略は順ひく反と異賊と撃とんと軍勢へひけ下知と
る暫時間打あつり敵の来ると待とるが早くと百濟の阿連山多く兵卒
と後へ計略をもつと勇ま立唯一文字は城門とて入ると待りつけると日
本勢すりやとの程とてあはれ督とて雨より驚く射立ふ必定靡汁薬の
功より動作かゝる倭勢ととあひあんでとありとるが案の外なる次第とて掛
声頻り勇ましく附立らるゝとる此鬼神の所為とるうと大将阿連山大いふ
駭き英氣忽地打つけ直地ととく還さるやと馬の首と立直せと多勢跡より
段々もあつちうけとるゝとるれば速は馬とまらすとあつちうと進退あら極ま
らちうとるゝが是もつひと士卒の面々我勢とと働くめのか。百濟の軍
勢討死する者半と過る此戦の中よりて大将阿連山と戦没ととるゝ
る事既に此の如くあらるれば龍岡縣の城中は國王背古と守護して

ありける伊林菓齒啗とありて毎念ふらひ阿連山が計畧相凌して及て倭軍
 は手もろく王城とらるれと怒り。昔古王よりらゝ寇早今ハ冒ふあまは臣自
 かう諸將と共に倭奴と撃んと存じばあて免さるへと奏しつゝやて諸將小
 示して曰く此一戦こそ我百済国の真敗るかりんき一大事なれが各活て再
 ひ歸らんことあつて勿し備戦ふ臨むとて倭奴たと撃んせんが右より致ひ
 前より攻るれば後より互ふ力と助くべしと牽綴の計と申し合ひ。金以成と
 つる者と左防將とてたよ備と立てせ。沈應西とつへる者と右防將とて右の
 備へとるるれ池半橋とつる者と助防將とて後よ備と立てせ伊林菓自ら
 真先よ進み赤毛の悪馬よ白衆とて手せて打進む時よ宿祢ハ遂安郡よ潜
 居あひし皇太后と唯今乗取し王城へと清く奉り諸將一統勝軍と歡び
 休息してを在るら伊林菓諸將と凌へ。押寄来るるを城中に在し日本の
 諸大将大矢田宿祢中臣烏賊津連安陪高丸同介丸るへと我あらししと

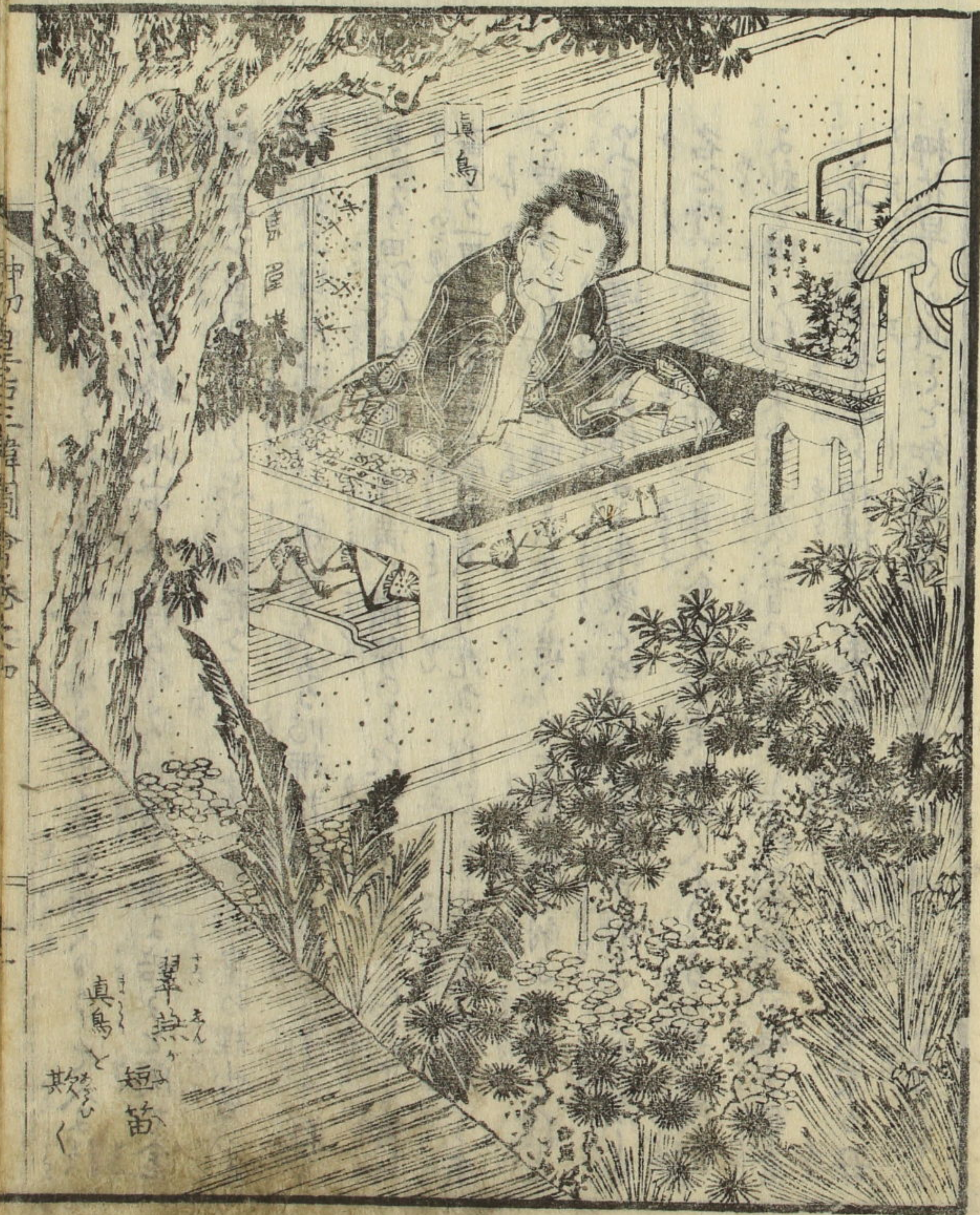
撃て出秘術と尽して戦ひるるが血の流るる川とあり屍ハついで岳とるる素より
 左右の防將よ備へる。金以成沈応西も備へと立く守りあらる。東西よ別と南北
 離れ難戦更よつべくもあは伊林菓ハ馬と乗倒して歩立とる。盛甲も打
 落し掩腋も引ちぬと手よ携へ剣も打折せん。日本勢の落せる剣と
 捨ひしる命限る勸げと不測も日本勢の方よ。俄に赫々たる光気立てあつと
 足とむつと能くば連も勝利ハ得べしとてあひ極めしとゆへ唯昔古王の心ろ
 めるる何とて此う人のいんものて此戦中と遁と王君に向く倭將よ降参と
 す。王君の御身と全しせん。此難戦の中とて二度三度あひとめらる。一
 幸りして戦中と遁と出竜岡縣へと走り去る。此時りる金以成ハ安陪高
 丸の手よ撃取。沈應西ハ鳥城津連自ら撃とり池半橋ハ大矢田宿祢の手
 よ撃とり。其余日本勢の手よ撃取者一千人は余りなき。百済の残兵ども
 素より臆病神に引されし大將の面々多く戦没るせば己がさむく逃散と

奉つしり

高兼王晋思降皇后

是よりして皇后百濟国より北に當つて。高兼国と退治せらる。降参せし
 百濟人と案内者として多く後へ歩み既百濟国と進發ありて十里
 六丁一里北に宿んで進ませる。辟友とて山の麓までいりて折
 一隊の軍勢向よりして出来れば。宿り高兼国より軍を起して来る者
 人唯戦ふ蹴散ると。烏城津連大矢田宿祢等。勇まきてどくく程進
 つひに熟々りて高兼国王晋思莫古と始め。多くの家臣と後へ迎へ日本人
 六敵の如しと知る。是も亦降人とあつて。此処まで出来りあり。それが
 皇后其の國を濟あそむる。高兼王晋思より年々朝貢と献ぐて永く
 日本の属国とあつて。神文とてせむひが。是より晋思彼辟友山より
 登つて磐石の上は居り。天と仰で盟て曰く。若草と敷て坐とせむ。恐らく

火は焼く。且木とて坐とせむ。恐らく水は流る。故へは磐石の上
 居て盟とあは長く不朽とあはる。是と以て今より以後千秋万歳絶つと
 る。窮るまで常西の蕃とあはる。春秋は朝貢と献ぐ。其身大はひく
 く平伏て盟言とてまゝなる。世は神前れた右高兼大とあはること。是より
 してと始まつて。其説の是非あはる。猶後人の考と後へ其後晋
 思一張のいと古れり。皇后は奉り。此より吾先祖東明王の常は持つる。ら
 やと高勾廉第一の宝ありといへ。今より長く後ひ奉る。倭国の君み
 捧るといへ。皇后はと手はと上。其志と賞せられ。宿音思と後へ
 高兼国へと入る。一度其国と一見あり。程なく国の事とまはる。尤心得と
 国王晋思は命とあは。高兼国とまはる。新羅とて退治あり
 傳は曰く。高勾麗の国初は漢の昭帝建昭二年は當つて。高朱蒙や
 といふ者。始めは高勾麗の国とあは。其傳記は一段の奇説



神功皇后三韓圖

翠燕
真鳥
短笛
欺



神功皇后三韓圖

翠燕

皇后以弓末録石於七字

神功皇后百濟高廉の二国を従へりて新羅国へと歸らせり。翠葉女とて
 と因りて異国の婦人なりといふも其の功を賞はべりて及つて是と賞
 大い三瀛真鳥の不覺の事。是日本の耻辱なりと大いに後悔せり。其の事
 借皇后厚に名を著す。如猛虎として新羅の国王と争ひて其名を礼
 斯勃とて更えり。國家と故り保つてあり。更に新羅の宰とて
 千熊の長彦といふ者と止り。又百濟国の宰とて斯摩宿祢といふ
 者にとり。弓末の事とて葛城襲津彦といふ者にとり。其の事
 ゆるや三韓一統後ひぬるに上りて日本へと歸らせり。思
 召るひ此以後吾日本の感と三韓を市にやんと宣ひ。去らるる国の王城の前
 あり大石へむけ。皇后自ら弓末とて三韓王日本豹也と神代文字を
 七字と記し。弓末の事。不思淺かり石面楚と残り。さるがごとく鑄付る

後世三韓の人々が誇りて吾三韓を残り。此上もるれ
 耻辱なり。此石として取捨んとあへり。其の事
 ばされ消さんとす。威は焼人となれ。割へ此石を取捨んと
 ぞ。奇病を煩ひ。不思淺の性孽多れば再びこれを去んと
 する者。今尚平安道の平城小頭然として残る。其の事
 吾日本の徳なり。最あり。此石として斯て皇后より多くの御軍
 勢と送へり。日本として舟を歸させり。其形勢ハ龍神も威徳ハ
 あされ。蹲踞す人とあはれ。目ざす。其の事
 国の長臣毛麻利。百濟国の長臣伊林菓。高廉国の長臣莫古の面を
 皇后の舟と日本まで送り奉つ。右三韓よりして八十艘の舟を綾
 羅錦繡とつて貢物と奉り奉つ。則ちこれ後々まで例となりて。年々
 三韓よりして八十艘の貢物と日本へむけり。其八十艘の船泉列塚の

神功皇后三韓圖會卷之四

門外之石神代文字之圖

此七字則謂三韓王

日本天也

今猶在於

朝鮮國平

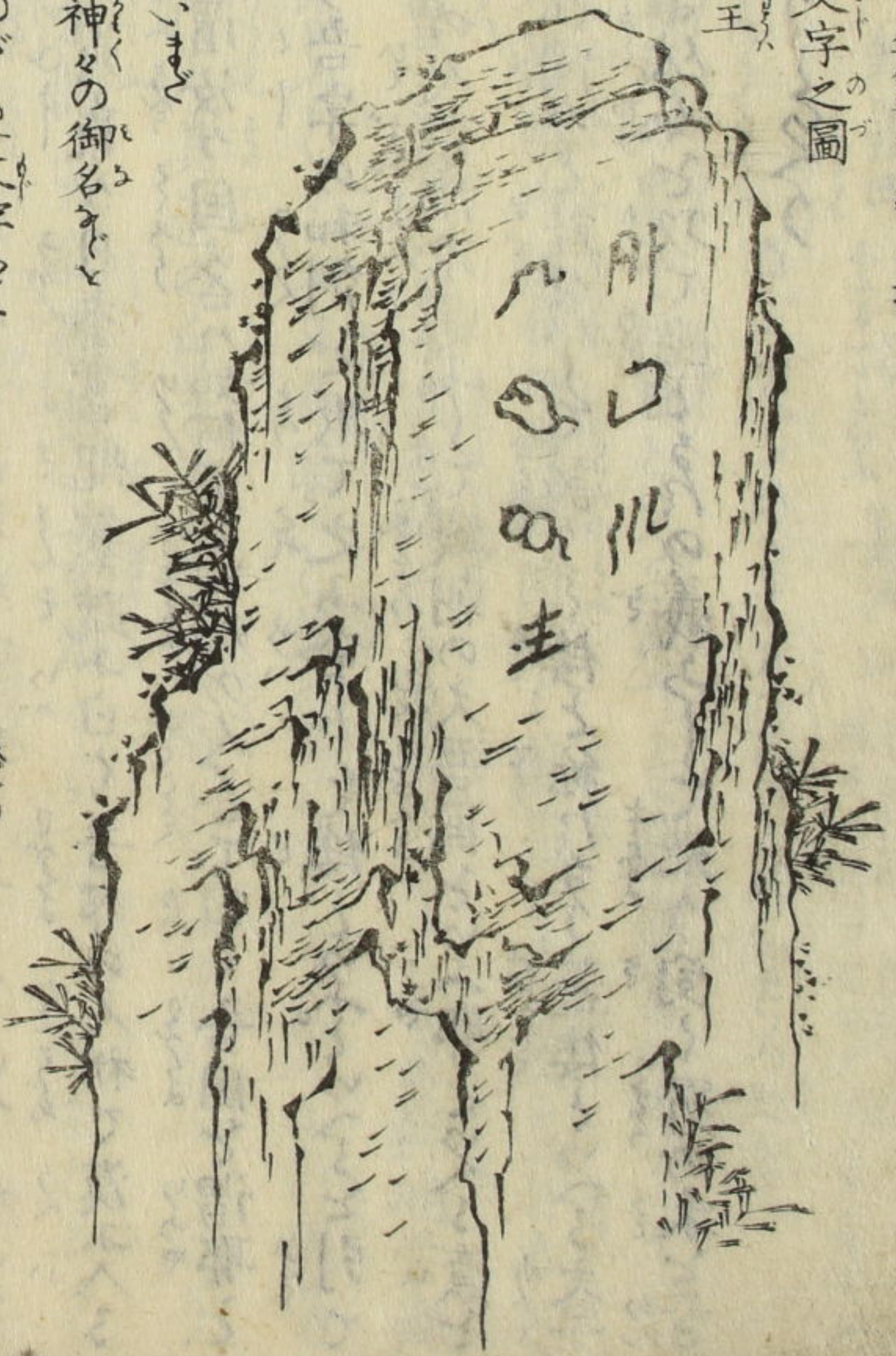
安道平城

上古漢土の文字といふ

吾國は用ゐる時ハ神々の御名也

木の燃杭にて斯のぐら文字也

記す也は國字と加那といふ



東陽 戴斗寫

應需

東陽 白申書

譽田皇子御降誕

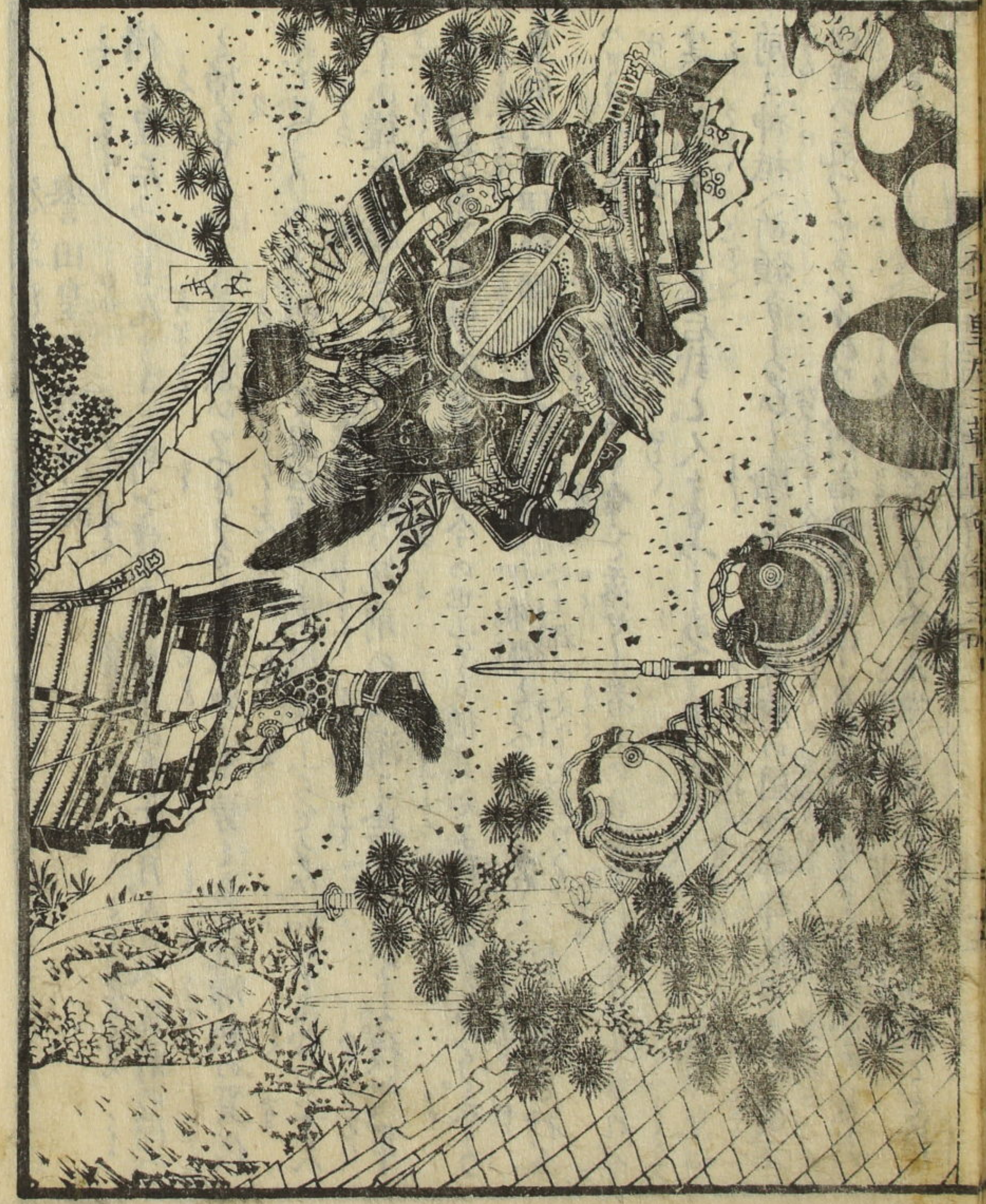
儲も皇后の首尾より三韓と後へい。同年の冬十二月。大日本筑前の國へ
 と歸らせり。其の歎ひのふけりき。諸軍勢も勇立。一統歸朝の賀儀
 とどほせり。此地にて皇后軍船より陸へ上らせり。始めて心と身
 船の帆柱。年と歴は石とありて。今の世も猶其処に残りて。夫より
 皇后同國伊都郡岐田あり。紀列は伊都郡といふ同名あり。放生會と行る
 けり。あは三韓の戰場あり。命と落せ。者共の爲とて行ひし。されば
 實は仁心尊き皇后也。人々のあはれあり。是我朝放生
 前は神祇へ祈願あり。驗あり。此筑前の國伊都郡岐田は於て俄に
 此産の氣つせり。武内宿祢も中臣烏賊津連も急死。此産家
 用意とす。此処へと東南の陽氣とひきく。坐とめり。奉り。介抱とせり。



皇后

皇后以弓未
錄石於七字

甲子年三月廿一日



武女

神功皇后三月廿一日

のよあけれんやと密に謀叛と入止て倉見別宿祢五十枚茅宿祢と共事成
 計しん構へて心とつとせむい其計畧小陥りもつとるれ此を知らし
 もつとるんと正しれ告のありる皇太后偕へて駭きまひ直地は武内宿祢
 とりて如此々のことと語らるるひ應く武内を都の近国まで赴かせ麁坂
 忍熊兩王子の容子とらひあつと果して麁坂忍熊の兩王子倉見別宿
 祢曾と共叛逆と企て乃ち偽つて仲哀帝の陵と皇后の歸り路と興あふ
 皇后其処へつとる人の必定るれば其時まゝの兵と埋伏せられあつとる
 て此度生るる所の皇子共弒せんと西行せしむるもつと應く播磨の国赤石
 郡垂水にて舟を編て淡路島に組し淡路島の石と運んで天皇の陵と造り皇后
 のつとせむいことと兵と伏て相待居ると分明らば武内宿祢熟く文と窺ひたり
 直地小穴門より皇后の許へ立歸りて此趣と奏聞せむ皇太后尤あつとるん
 て是より播磨へつとる立寄ゆもつと直に紀伊なる加田の浦へと譽田 皇子

共々の舟をつつとせむいひらるが皇子の舟の中つと啼泣しつとあはれ何
 どもるる金色の鴈多く飛来して舟の風脚は止りつと皇子多岐は止りつと彼
 鴈飛去とあはれ又皇子泣出さひまゝの飛来するも皇子泣止りつと遂はまの
 鴈は飛去らず皇子と守護する形勢は不思議なりつと奇瑞といつとる
 皇八幡宮と皇跡とて後にも鴈と以て遣使とすつとるんが此八幡宮と
 引矢神と名せらるることにて武士の兒は鴈形とて用あつとるんといはれり
 因つとる譽田皇子生れつとせむい後種々の奇瑞ありつと多し理りつと武
 此君の成長の後つと有がれ聖君よほつとて殊は吾朝まゝ文武兩
 道の祖神と崇め奉りつと此君人皇十六代の位に即せらるつと應神天
 皇つとるやつとるが則ち在位十五年秋八月百濟國の阿花王阿直
 岐王仁とつとる兩人とて經典と責りつと是吾朝儒學の始りつとて應神天
 皇弟二の皇子菟道稚郎子あつとる兩人を師として典籍と學ひつとる
 通達とてつとるん又此應神天皇三十七年春二月吳の國つとるんを吳

